

怪談物件マヨイガ2

蒼月海里

第三回

けが こんせき
穢れの痕跡

九重このえはハツキリと、八坂やさかの名前を口にしていた。榊さかきは、彼のフ
アミリーネームしか伝えていないというのに。

「九重さん、八坂さんを知っているんですか……?」

「ああ」

九重は短く答える。

「その……一体、どういうお知り合いで……。同業者っぽいですけ
ど……」

同業者。

そう言った瞬間、九重の眉間みけんにぎゅっと谷が刻まれた。

「わっ、すいません……!」

榊おのれは思わず謝ってしまう。すると、九重は眉間もを揉んで息を吐き、
己おのれを落ち着かせるようにしてこう言った。

「呪術じゆじゆつを扱うことを生業なりわいとしている者として、俺も彼も、広義の呪
術師ではある。だが、やることは違う」

九重の手の中にあつた呪符は、すっかり黒ずんでボロボロになつていた。辛うじて残つていた最後の一片を、風が無慈悲に攫つて行く。

「俺は呪いを解く。奴は、呪いをかける」

「呪いを、かける……?」

「正確には、俺も自らの呪いを対象にかけることで打ち消しているんだが、結果的には、その場の呪いがなくなるわけだからな」

「八坂さんは、上乘せをするという感じですかね……」

榊の言葉に、九重は無言で頷いた。

「どうして、そんなことを……」

「苦痛をなくすため」

九重は、ポツリと言った。

「——そう、奴は言っていた」

「僕も、それに近いことは聞きました」

クレーマーがこれ以上呪いを振り撒かないためにも、榊の呪いを使ったのだ、と。

「確かに、苦痛は減った方がいいと思いますけど、矢内さんだって苦しんでいた……。被害を減らすために一人が苦しんでいなくなるべきかという、そうじゃないような……」

「……そうだな」

九重は、どこか安堵あんどするように息を吐く。榊の意見と、ほぼ同じなのだろう。

「それに、吉原よしはらさんも八坂さんに呪われていたんですよね……？あの人とは他人に迷惑をかけていないのに、どうして……」

「俺達が部屋に入った時、彼女は苦痛を感じていたか？」

「……！」

九重の問いに、榊は言葉に詰まる。

榊は、吉原の家に突入した時のことを思い出す。

どんなにチャイムを押しても、どんなに扉たを叩いて呼びかけても答えはなく、合鍵で無理矢理扉を開くと、真っ暗な部屋が二人を迎えた。

その真ん中で、彼女はだらりと座り込んでいた。虚ろうつろな目で、動画配信サイトのメニュー画面を映すテレビを眺ながめていた。

だがその顔は、笑っていた。薄笑いであつたが、幸せそうですらあつた。

しかし、彼女の名を呼んでも、視界を遮かざっても、全く反応がなかったのだ、異常事態を察した榊は彼女に気つけを行ったのだ。

「完全に意識がどこかに行っていましたけど、幸せそう……でした」

「彼女が望んだ結果だったんだろうな」

「数日間飲まず食わずで、衰弱死しそうだったのに？」

「それでも、彼女は幸せだった。君が彼女を正気に戻すまで、彼女の認知の中では」

「それはつまり、呪いによって幸せを錯覚させられていた……？」
榊は自分でそう言っ、ぞっとした。

今まで、九重とともに呪いを目の当たりにして来た。大抵の人は呪いに苦しみ、不幸になっていた。

だが、呪いによって幸福になり、心も身体も蝕まれていく人もいるのか。

「呪いは認知の歪みだ。幸せにも不幸せにもなる」
九重の言葉は、妙に納得出来た。

負の感情ではない、願いすら呪いになるのだ。呪いで幸福になってもおかしくない。

だが、呪いとは歪みなので、齎す結果は歪んだものだが。
「どうして……」

疑問が次々と溢れ出す。不可解なことばかりだ。
だが、一番気になるのは――。

「立て続けに、マヨイガが管理している物件に呪いがかかっていたことが気になる。君に接触したのは偶然かもしれないが、会社の近くにいたのは偶然ではないだろう」

「マヨイガの物件が、狙われているんですかね……」

どうして、と再び疑問が浮上する。創業者が残した怪異を解決し、ようやく未来に向かって進めると思ったのに。

「他の物件を調べてみるべきだろうな。室外機や郵便ポスト、水道メーターなどに呪符がないか確認した方がいい」

「……そうですね。上司に相談してみます」

とてもではないが、自分一人で作業ではない。だが、理解がある柏崎かしむらきであれば、動いてくれるだろう。

「榊」

「はい……」

「君はマヨイガの社員だ。また、あの男に会うかもしれない。だが、あの男の話に耳を傾けるな」

今までで一番、強い口調だった。

榊は返事をするのも忘れ、先ほどの疑問が口をついて出てくる。

「九重さん、八坂さんとはどういう関係なんですか……？ その、

同業者ってだけじゃないと思うんですが……」

「複雑な関係だ」

九重はそれっきり口を閉ざし、榊の問いに答えることはなかった。

その表情は痛みに耐えているようで、榊もまた、それ以上踏み込む勇気が湧わかなかった。

八坂の印象は、呪いとはかけ離れたものだった。

彼の姿は、色とりどりの花が咲き誇る春の街そのものであったし、柔らかな笑顔も木漏れ日のように爽やかであった。

とても、恐ろしい呪いをかけるようには見えない。

榊は矢内が吐き出した大量の百足を思い出し、ぶるりと震えた。

あの百足も実体はなかったので、呪いの具現化のようなものなのだろう。

「パステルカラーの春めいた男、ねえ」

榊から事情を聴いた柏崎は、苦虫を噛み潰したような顔をしながら、パソコンのキーボードを叩いていた。

「そんな男がいたら、目立ちそうなものだがな」

「いや、目立つなんてもんじゃないですって。髪がピンクとか紫のメッシュですし。ただ、様になり過ぎていて、東京の街に完全に馴染んじゃってましたけど」

「でも流石に、市ヶ谷にいたら目立つよな。原宿ならまだしも」
榊の話に耳を傾けていた同僚が、口を挟む。

「確かに、原宿っぽい感じだったな。スカウトに声を掛けられまくりそうだけど」

歩き方も堂々としたものだし、容姿も整っている。呪術師ではなく、モデルやタレントと言われた方がよほどしっくりくるのに。

「……妙だな」

柏崎は首を捻る。

「どうしたんですか？」

「いや、お前がそいつと会った居酒屋の店主にSNSで訊いてみたんだが」

「早っ！　なんかカタカタやってるなと思ったら、DM打ってたんですか！」

柏崎の行動の速さに目を剥きつつ、榊は彼女の言葉の続きを待った。

柏崎は怪訝な表情のまま、こう言った。

「店主はそんな奴、見てないそうだ」

「えっ。でも、あの人、店主さんにおすすめをオーダーしてましたよ」

「妙だな。あそこの居酒屋は何度か使ったことがあるが、店主は客の顔を覚えるタイプなんだ」

因みに、榊の顔は覚えていたらしい。酔っぱらってグスグス泣き出し、何度も宥められるほどであったが、相手に名刺を差し出す姿勢だけはちゃんとしていたという。

「……もう、深酒しないようにします」

榊は穴があつたら入りたい気持ちだった。

「お前のことをこれだけ覚えていのに、お前を宥めていた相手のことは覚えていないそうだ。そこに確かに誰かいたし、会計もきっちりしたが、どんな奴だったかは頭からすっぽり抜けているんだと」

「や」

「どういうことだ、と柏崎はぼやく。

「認知が……歪まされていたんですかね」

「認知が何だって？」

「多分なんですけど、呪いって認知に関係するものだから、呪術師なら他人の認知を操作出来るのかもって思いまして……」

自分で言っ、ゾツとした。

それはつまり、八坂は意図して、榊にしか自分を認識させないようにはしていたということではないか。少なくとも、彼は居酒屋に入る前から標的を榊に絞しぼっていたのだろう。

浮かれた服装なのに、抜け目のない男だ。

榊が八坂のことを思い出していると、突如とつじょ、外線のコールが鳴った。

「ひょー」

榊は驚き、同僚が出る。すると、受話器ごしに怒鳴り声が聞こえた。

何と言っているかは分からない。だが、同僚は無理矢理営業スマ

イルを貼りつかせ、電話越しにペこペこ頭を下げて謝罪する。

恐らく、クレームだ。

数分の通話の後、同僚は受話器を置いて大きな溜息を吐く。そして、パソコンの画面を指さしてこう言った。

「心霊課、お前の出番かもしれないぞ」

「いや、勝手に部署を作らないでくれよ。怪異のクレーム？」

怪異という単語がすんなり出て来て来てしまう自分に嫌気がさしつつも、榊はパソコンの画面を見やる。

「クレーム自体は騒音問題だ。動画サイトの配信者がマンションに来るから、そいつをどうにかして欲しいんだとき。ただ、そのマンションが問題なんだ」

『幽霊マンション』……」

内部資料の物件の備考欄には、そう書かれていた。

柏崎と同僚の視線が、榊に注がれる。榊は、この件を引き受ける覚悟を早々に決めたのであった。

『幽霊マンション』と呼ばれたそのマンションは、十四階建ての古いマンションであった。白いはずの外壁は黒ずみ、外階段の手すりには錆が浮いて、陰鬱さに拍車をかけていた。

不名誉な名前で呼ばれるきっかけとなったのは、数年前の自殺騒

ぎであった。外部の人間が、最上階から投身自殺を図ったのである。

建物の出入り口はオートロックでなく、管理室は管理人不在が多
い上に、外に面した廊下があったためだろう。それから事故物件情
報がネット上に掲載され、マンションの外観がおどろおどろしいの
も相俟^{あいま}って、人々は『幽霊マンション』と呼ぶようになったのだ。
「物件についての前情報で負の感情を抱くというのは、それだけで
認知の歪みが発生している。つまり、呪いが集まっているというこ
とだ」

榊の隣で、マンションを見上げながら九重は言った。

「じゃあ、今回の一件も呪いが……」

「それは分からない。だが、呪いを使う者にとって、都合がよくな
る場合もある」

その呪いを使う者というのは、八坂のことだろう。

「このマンション……分譲しらみつぶなんですよ。他の物件は他の不動産会
社が管理しているから、虱潰しに調査は出来ないんですよ。本当
は、全室の室外機を見られればよかったですけど」

「室外機があるのはベランダだろう？ 奴があまり高い場所に侵入
するとは考え難い。階層が高い部屋のベランダを調査する必要はな
いだろうな」

「あ、そうか。外部の人が侵入出来る場所を探せばいいんですね」

そうになると、郵便受けか水道メーターだろう。郵便受けは一階の
エントランスにあるし、各部屋の水道メーターは廊下にある。

「尤も、奴がターゲットにしているとは限らないが」

「そもそも、今回、報告されているのが、外部の人間による騒音ト
ラブルですからね……」

動画サイトの配信者が『幽霊マンション』にやって来て、毎晩の
ように肝試しをするという。その声が煩いので、追い返して欲しい
というのがクレームの内容だった。

むしろ、怪異でない可能性の方が高い。だが、八坂の一件がある
ので、榊は九重にも同行を頼んだのだ。

「すいませーん」

榊は管理室に声をかける。だが、煌々と照明がついているにもか
かわらず、誰も出て来なかった。

「あの、すいません！」

管理室の窓ガラスをノックする。それでようやく、奥から年老い
た管理人がやってきた。

「はいはい、どうしました」

「昨日アポを取らせて頂いた、不動産会社マヨイガの榊ですけど、
調査をさせて頂いても構いませんか？」

「はいはい。酒井さんですね」

「いえ、榊です……」

「ああ、酒屋さんでしたか」

「不動産屋の榊です……」

そんなやり取りを続けて数分、榊はようやく管理人に不動産屋の榊として認識してもらえた。榊がぐったりして戻る頃には、九重はずらりと並んだ郵便受けの調査をしていた。

「管理人さんの許可を得てきました……」

「ご苦労だったな」

「いや、本当に苦労しましたよ。あの人が管理人で大丈夫かな……」
動画サイトの配信者が夜間に侵入した形跡はないと管理人は言っていたが、そもそも管理人は十八時で帰宅してしまいうらしい。証言は怪しいものだと思っ

た。「外部の人間が投身のために入り込まないよう対策をしているつもりなのだろうが、本当に『つもり』なのかもしれないな」

「まあ、何かあった時に、人がいれば言いわけが出来ますしね……」

嫌な話だ、と榊は辟易へきえきした。形だけの対策では、根本的な解決にならないのに。

「因みに、そっちは何かありましたか？」

「今のところはない。痕跡も見当たらない。だが、郵便受けの中を見たわけではないからな。巧妙に隠されていたらお手上げだ」

「郵便受けを覗くのは犯罪ですしね……。でも、痕跡がないなら安心です」

地道な調査が必要だが、少しずつ安全を確認できればいい。

九重は夜の闇のように静かな人物だが、朝日のように少しずつ闇を照らしてくれる。

そんな九重といると、榊はとても頼もしかった。

「クレームを入れた入居者は？」

「三階の大久保さんです」

九重と榊は、エレベーターで三階まで上がる。エレベーターの照明はチラチラと点滅し、天井には蜘蛛の巣が掛かっていた。

「清掃業者は入ってるはずなんですけどね。あんまり掃除が行き届いてませんね」

「形だけの清掃業者なのかもしれないな」

「管理人も形だけだし、有り得ますね……」

怪異以上に根深い問題がありそうだと、榊は頷いた。

榊は九重とともに、大久保の部屋までやって来る。廊下は外に面していたが、周囲が真新しく高いビルに囲まれているせいで、陽光は届かなかった。

じつとりと湿って埃っぽい風だけが、ねっとり頬を撫でていく。

雨水用の排水溝には、誰のものかも分からない髪の毛が絡まった綿

埃が溜^たまっていた。

廊下はやけに、がらんとしていた。入居者の家の前にやって来るまで、住民と一人もすれ違わなかった。

本当に、人が住んでいるのだろうか。

榊は疑問に思いながら、周囲の部屋の扉を見やる。表札はほとんど出ていないが、都心に住む人はプライバシーを気にして出さないことも多いので、入居者がいるのかいないのか区別がつかない。

だが、無人だと言われても納得してしまうほど、人の気配がなかった。榊と同じ違和感を抱いているのか、九重もまた、しかめっ面^{つら}で周囲を見渡していた。

「ひとまず、直接話を聞いてみますね。本当なら、もっと別の手順を踏むんですけど、今回はちょっと状況が特殊ですし」

「ああ。助かる」

八坂の痕跡を調査するためには、住民と直接接触する必要もあった。それに、入居者が住んでいるのは低層の三階だ。心得のある者ならば、ベランダに侵入出来ない高さではない。

榊はインターホンを鳴らす。だが、返事はない。

留守かなと思いつつ、もう一回インターホンを鳴らす。すると、鉄の扉を乱暴に殴^{なぐ}りつける音がした。

「うわっ」

「また来たのか！ クソ配信者め！」

扉越しに、男の低い怒声が響く。榊は慌てて「違います！」と叫んだ。

「マヨイガの職員——榊です！ 本日は詳しいお話を聞きたくてお伺いしたのですが……！」

「詳しい話なんて必要ねえ！ うちの前によく来る、迷惑系の配信者を摘まみ出してくれればいいんだ！ あいつらのせいで、寝られやしねえ！」

「お疲れのところ、大変申し訳御座いません。せめて、数分だけでも……！」

「煩い！ さつさと俺の言う通りにしろ！」

取り付く島もなかった。榊がいくら説得しようとしても、「煩い！」

「さつさと行け！」としか言われなかった。

「き、気難しい人だな……」

これはいいよ、クレームが本当かも怪しくなってきた。

「九重さん、何か分かりましたか……？ いや、流石にこんなんじ

やあ、分からないか……」

至らなくてすみません、と榊は項垂れる。九重は眉を寄せたまま、じっと扉を見つめていた。

「部屋が散らかっているんだろうな。気配を捉え難い。だが、引っ

かかることがあるな」

「痕跡っぽいのがあったんですか？」

「いや、それは分からない。だが、この部屋の住民は、何かに怯おびえている」

「えっ？」

榊は耳を疑う。むしろ、周囲を威嚇いかくしようと声を張りあげているとすら思っていたのに。

「虚勢を張っているように感じられた。配信者とやらに対して、怒りよりも恐れがあるのかもしれない」

「あいづらつてことは複数人みたいですし、迷惑系の配信者が集まったら確かに怖いと思いますけど……」

動画投稿サイトの迷惑系の配信者とは、その名の通り、迷惑行為を配信する輩やからのことである。犯罪まがいのことをする過激な者もあり、警察に捕つかまったり裁判を起こされる者もいる。

「でも、大久保さんの怒鳴り声って迫力があるし、僕もかなりドキドキしたし、一声あげれば立ち去りそうな気もするけど……」

「他の住民に、話を聞いてみてはどうだ？」

「……そうしてみます」

九重の案には賛成だった。あまりにも情報が少なすぎる。

だが、それぞれの家を訪問して聞き込むのは気が引けた。出来る

ことならば、他の入居者に世間話を装って話を聞いたかった。榊は警察ではなく、一介の不動産屋の平社員なのだから。

しかし、榊の思いも空しく、他の入居者とは全くすれ違わなかった。

三階の廊下を何往復しても、誰とも会わなかった。一階のエントランスに戻るものの、誰も帰宅しないし、誰も出て行こうとしなかった。

管理室の灯りは、いつの間にか消えていた。まだ管理人の帰宅時間ではないはずだが、休憩にでも出ているのだろうか。

よく見ると、管理室の窓枠にも蜘蛛の巣が張っていて、何年も放置されているように見えた。

自分が会話をした管理人も幻のように思えて、榊は身震いをする。

「……九重さん」

榊は九重の上着の袖を、ギュッと掴む。

「どうした？」

「いえ。僕、ちゃんとこの管理人さんと話してましたよね？ 暗い管理室に向かって独り言を言ってたわけじゃないですよね？」

「ああ。あの老人と話していたらどう？」

九重は、マンションの外を顎で指す。そこには、コンビニのビニール袋を提げてマンションに帰って来る管理人の姿があった。

「よかった……。本当に席を外しているだけだった……」

「君は今、自らに呪いをかけようとしていたな。自らが感じるものを、怪異だと思い込みそうになっていただろう」

「すいません……。こんなところなので、つい」

「いいや。謝る必要はない。無理もないことだからな」

結局、榊達はエントランスで人を待つことを諦め、各階の廊下を歩いてみることにした。その過程で、九重が何らかの手掛かりを得るかもしれない。

二階、三階、四階と外階段を上がっていく。その間、二人は誰にも会わなかった。扉越しに生活音が聞こえることもなかった。

このマンションは、ほとんど人が住んでいないのではないだろうか。

榊が人とすれ違うことを諦めそうになった八階で、ようやく、エレベーターホールに向かおうとする若者を見つけた。

「あの！ すいません！」

榊は思わず、大声で若者を引き留める。若者はビククリして目を見開き、榊達の方を振り返った。

「な、な、なんですか！」

「いや、驚かせて申し訳御座いません……！ ちょっと、聞きたいことがあります……！」

榊は小走りで若者に歩み寄る。若者は、しきりに辺りを気にしてから、榊達と向き合った。

「私、不動産屋の者なんです。それで、騒音の件について調査をしていまして」

「……あの人が煩いって、誰かがクレームを入れたんですか？」

「え？」

若者は怯えるように周囲を見回しながら、声を潜めて榊に問う。

「あの人って……」

「三階の……大久保さんですよ」

「いいえ。その——どうしてそう思われるんですか？」

まさか、騒音を解決して欲しいと言った本人の名前がそんなところで出るとは思わなかった。虚を衝かれた榊は、若者に倣って小声で問う。

「あの人、やりたい放題だったんですよ。だから、みんなクレームを入れて……」

若者が言うには、大久保は仲間を家に呼び、深夜まで酒を飲んで騒ぎ、ベランダでタバコを吸ったりバーベキューをしたりとやりたい放題だったらしい。

ベランダで騒いでいた時は、若者の家まで声が届いたそう。大久保の声がよく通ると、壁が薄いのが相俟って、酷いものだった

という。

それで、周囲の住民は各々の管理会社にクレームを入れたり、警察に通報したりした。

だが、その後日、大久保は仲間とともに、一軒一軒つぶさに回って、クレームを入れた者や通報をした者を探し回ったという。その目的は勿論、お礼参りだ。

「それで、みんな怖がって引越してしまったんです……。私は学生でお金がなくて……。でも、就職先が決まったので、卒業したら出ていくつもりです……」

「成程。なるほど住民の気配がなかったのは、そのせいだったのか……。うちの会社が持ってたのはあの部屋だけだったから、他の部屋の情報がなかったんだ……」

榊は納得する。一つの視点から得られる情報だけでは、当てにならないことが分かった。大久保に関しては、他社に寄せられたクレームの記録も残っているかもしれない。

だが、問題はそこではなかった。

「それじゃあ、動画の配信者が騒いでいたことはありますか？ このところ、毎晩のように来ているみたいですけど……」

榊が尋ねると、若者はキョトンとした表情になった。

「動画の配信者ですか？ さあ、分からないですね……。最近は、

とても静かなんですよ。夜になると偶たまに、大久保さんの叫び声みないなのは聞こえますけど、お仲間とベランダで盛り上がった時よりは、ずっとマシです」

若者は力なく笑いながら、榊達に別れの挨拶あいさつをして去って行った。榊は違和感を抱いたまま、九重を見やる。すると九重は、鋭い目つきで若者が去った後を見つめていた。

それから数人の住民に話が聞けたのだが、言っていることは若者とほぼ同じであった。

大久保が騒音トラブルを起こしていたことと、最近はマシになっていること。だが、夜になると叫び声のようなものが聞こえること。そして、動画の配信者なんて見たことがないとのことだった。

気づいた時には、陽はすっかり沈んでいた。

動画サイトの配信者とやはらは、夜になるとやって来るといふ。榊は九重とともに、三階の非常階段に身を隠しながら待つことにした。「来ると思います?」

榊は声を潜めて問う。九重は、三階の廊下に気を配りながら答えた。

「……可能性は低い」

「ですよね。配信者の存在を主張しているのって、大久保さんだけ

ですし。もしかしたら、大久保さんに何らかの呪いがかかっているんじゃないですか？ その、認知が歪んでるのかも、って」

「扉越しに気配を探ったが、色々なものが入り混じっていて探り切れなかった。散らかっているのかと思ったが、もしかしたら——」

九重が物陰から踏み出そうとしたその時、「ヒイイイッ！」と悲鳴が聞こえた。

「今の、大久保さんの声……？」

「行くぞ！」

九重は走り出し、榊もそれについて行く。大久保の部屋の前までやって来ると、彼の叫び声が聞こえた。

「嫌い！ 嫌い！」

「大久保さん、どうしたんですか？」

「配信者が来てるだろ！ そいつを追い返せ！ 嫌いんだ！」

榊は背後を振り返る。だが、誰もいなかった。

「開けるぞ！」

九重はドアノブを捻る。

すると、扉はすんなり開いた。鍵が掛かっていなかったのだ。

榊も、九重とともに突入する。

その瞬間、つんとした臭いにおが鼻の奥を突いた。

「うわっ……」

九重が言っていたように、部屋の中は散らかっていた。

いいや、散らかっているなんて生易なまやろしいものではない。カップ麺や弁当の空き容器が積み重なり、黒ずんだ衣服が辺りに放置されていた。

「お前達、何やってるんだ！ あいつらを追い返せ！」

大柄の男性が、部屋の隅すみで小さくなりながら金切り声を上げている。彼が、通報者である大久保なのだろう。

「あいつらって、誰もいませんよ。落ち着いてください！」

「お前達には聞こえないのか！ あんなに煩い奴ら、話題と再生数が欲しいような連中だろう！」

しかし、榊が耳を澄ませても何も聞こえない。

そんな彼らの背後で、鉄の扉が閉まった。

「……これは！」

外界と隔絶された瞬間、榊の耳に飛び込んできた。耳障りみみざわりで不快

な声の、数々が。

ある者は嘲りあはけ、ある者は非難し、ある者は嘆いている。

「お前なんていなければいい」「あんなことをするなんて信じられない」「お前のせいで台無しになってしまった」という声が、次々に響いている。スクープを求める配信者とは全く違ちがう、怨嗟えんさの声だ。

その声は榊の後ろから聞こえる。すなわち、扉の方から――。

「見つけたぞ。——急急如律令。きゅうきゆうによりつりまう 我が呪いにより解けよ！」

九重は印を切って呪文じゆもんを唱えたかと思うと、鉄の扉に取り付けられた新聞受けをこじ開ける。

その中から、ぶわつと黒いものが溢れ出した。

「ぎゃああっ！」

大久保が叫び、榊も声にならない悲鳴をあげる。

それは、無数の百足であった。

百足は榊の目の前を横切り、鉄の扉をすり抜けて、大久保の部屋から去って行く。空の新聞受けからは、一枚の呪符が落ちて来た。

「そんなところに……！」

「イエの中に仕掛け、イエの中だけに呪いが行き渡るようにしていたのか。だから、気配もが漏れなかった……」

九重は扉を開けると、無数の足を蠢うごめかせて逃走する百足を追う。

榊は大久保の方を振り返るが、彼は目を剝いて気絶していた。

「この人も、呪われていたんだ……」

榊が聞いた声は、老若男女様々ろうじやくなんによであった。恐らく、彼によって退去を余儀なくされた人達だろう。

中には、聞き覚えがある声もあった。それは紛れもなく、昼間、調査に応じてくれた若者のものだった。

彼の声もまた、怨嗟を叫んでいた。「ここからいなくなればいいの

に」と。

「九重さん！」

榊は一拍遅れて、九重を追う。

「やっぱり、八坂さんが……」

「あの呪符と呪いの形、同じだった」

九重は振り返ることなく、走りながら答えた。

「どうしても、大久保さんは配信者だと思ったんでしよう……」

「我が身を省^{かえり}みない者に、呪いの言葉は届かない」

自分が少しでも悪いと思っていたら、呪いの言葉を正しく認識出来ていたかもしれない。

だが、自分に心当たりがないので、無関係なところからやって来る迷惑な相手として、過激で迷惑行為をする動画サイトの配信者だと思ったのだろう。動画配信者でそういった者は少ないが、世間ではどうしてもマイナスイメージの方が大きく取り上げられがちだ。

真つ黒な百足はもう、見えなくなっていた。

だが、九重は迷うことなく外階段を駆け上がり、屋上に向かった。

屋上に通じる階段には『立入禁止』の札を下げたロープが掛かっていたが、そんなものは見えていないと言わんばかりに乗り越えてしまった。

屋上に辿^{たど}り着いた途端、ひんやりとした風が榊の顔面に吹き付け

た。それは大久保の部屋でまとわりついた微臭かびくささをさらって行き、代わりに、都会に染み付く硫黄いおうの臭いを運んで来た。

周囲が高いビルに囲まれた屋上には、四角く切り取られたような空がぼっかりと浮かんでいた。

都会の光に照らされてぼんやりと輝く雲を、一人の男が眺めていた。

夜だというのにパステルカラーのコートはよく映はえていて、冗談のように鮮やかな色の髪は陰鬱いんうつな夜からやけに浮いていた。

「八坂……!!」

九重が彼の名を呼ぶ。

すると、彼は振り返り、表情を輝かせた。

「庵いおりさん」

庵とは九重のファーストネームだ。あまりにも馴なれ馴なれしい相手に、榊はぎよっとした。

「それに、この前の不動産屋さんも。そうか、二人は知り合いだったんだね」

「そんなことは、どうでもいい」

九重は八坂をねめつげながら、バツサリと切り捨てた。

声には明らかに怒気が滲にじんでいる。こんな九重を見るのは、榊は初めてだった。

「三階の住民を呪ったのは、お前だな」

「いいや。このマンションの住民全員だよ。僕は彼らの呪いが、正しい力を得られるように手伝っただけさ」

八坂は、さらりと呪術を使ったことを認める。彼のベビーフェイスには笑みすら浮かんでいて、榊は背筋が冷たくなるのを感じた。

笑みといっても、悪意が伝わってくる類たぐいのものではない。純粹な、誰もがよく浮かべる笑顔だ。

八坂には、悪意も罪悪感も窺うかがえない。

「どちらにしても同じことだ。お前が手を貸さなければ、あの部屋の住民は呪われなかった」

「でも、彼がいなければ、このマンションの人々も引越さずに済んだんじゃないかな。それに、賃貸に出したオーナーも空あき家を持って余さずに済んだと思うけど」

八坂は榊の方を見やる。

確かに、賃貸に出した部屋が空き家のままだと、オーナーの家賃収入がなくなってしまう。大久保の騒音問題は、マンションの住民のみならず、マンションと縁えんが繋がつなっている人達にも被害が及んでいたということか。

「皆、彼がいなくなることを望んでいた。彼がいなくて、幸せなんだ」

「だから、彼を呪ったのか。お前の独善で」

独善、と九重は強調した。

八坂の口ぶりだと、誰かに依頼されたわけではないのだろう。彼は善意で、苦痛を取り除こうとしたのだ。

「他人の犠牲の上に成り立つ幸せを、彼を呪っていた者達は望んでいたのか？」

「人は誰しも誰かの犠牲の上で幸せになっている。でも、弱い者が強い者に蹂躪じゅうりつされるのが理ことわりだというのなら、僕はその理に反したいね」

八坂はさらりと言った。

「それで力を貸した、と」

「そういうこと」

「それは、弱者を虐しいげている強者よりもお前が強いからに過ぎない。お前は、理を名分にして独善を貫といているだけだ」

九重が断言すると、八坂はひらりと両手を上げた。

「流石は庵いんさん。僕なんかすぐに論破されちゃうな」

八坂は屈託くつたくのない笑みを浮かべる。

「でも、苦痛は少ないに越こしたことはないと思わない？ 誰だって、痛い思いや辛い思いはしたくない。だから、世の中の苦痛を減くらすんだ。僕はこの力で、みんなを幸せにしたい」

「お前に頼んでもいないのか？」

「人は幸せになりたいものなんだよ、庵さん」

今度は、九重が黙る番だった。

口を閉ざす九重に、八坂は肩を竦める。

「それで、僕には何の用？ 挨拶しに来てくれたのなら、嬉しいけど——」

八坂は探るように、九重を見つめた。

「妹を手にかけて僕を、殺しに来たのかな？」

「なっ……！！」

成り行きを見守っていた榊は、思わず声をあげる。

今、八坂は何と言った？ 妹を、手にかけて？

榊が動揺する中、九重は弾かれたように印を切る。だが、八坂の動く方が早かった。

「残念だけど、僕には目的があるからね。あなたの願いを成就させるわけにはいかないな」

八坂は屋上のフェンスをひらりと飛び越えた。

「お、落ちた……！！」

榊は慌ててフェンスに駆け寄る。だが、落下の際の衝撃音も聞こえなければ、地上に八坂の姿もなかった。

「消え………た」

「目くらましをされたようだ」

九重もまた、榊の横に並ぶ。また、何らかの方法で認知を歪まされたのだろう。

榊は九重に尋ねたいことがいっぱいだった。

八坂との関係は何なのか、妹が八坂に殺されたというのは本当なのか。そして、九重は八坂を殺す気なのか。

最後の問いは、我ながら馬鹿馬鹿しいものだと思っていた。常に冷静で理性的な九重が、そんなことを考えるはずがないと。

だが、フェンスを驚掴わしづかみにする九重を見て、榊は言葉を失った。

あの沈着冷静な青年の双眸そうぼうに、燃えるような憎しみが渦巻いていたからだ。

九重に掴まれたフェンスが、ギシギシと軋きしむ。九重の手がフェンスに食い込み、痛々しい色に変わっていたが、榊は止めることが出来なかった。

これは、呪いだ。

九重は己に渦巻く呪いと、必死に戦っているのだ。

榊はなんと声をかければいいか分からず、己の無力感に苛さいなまれていた。それでも、榊は九重の気が済むまで、黙ってそばにいたのであった。

(つづく)